



## 特別賞 丸善賞

書評 梨木香歩著 『家守綺譚』 (新潮社, 2006)

(和泉実務・軽読書コーナー: 新潮文庫 な-37-7)

文学部2年 栗田千尋

本書は、植物の名を冠した二十八の短い話から成っている。そして物語は、駆け出しの物書きである綿貫征四郎が、学生時代に早世した親友、高堂の実家に「家守」として住まうことで始まる。

四季折々の花が咲き、雨が降り、風が吹く。そして征四郎の周りで起こるささやかな不思議がある。床の間の掛け軸から、亡友の高堂がボートを漕いで訪れる、サルスベリの木に惚れられる、庭の池に河童が迷い込む、狸の恩返し、小鬼との遭遇等々。河童や小鬼といっても怪談のようなおどろおどろしさは無い。征四郎や私たちの住む此方と、彼らが住む彼方とが緩やかに重なり、交わりながら物語は悠然と進んでいく。時代背景は単行本の帯から察するに、明治三十年後半くらいと考えれば良いのだろうか。そこには「季節の営みの、まことに律義な」日本の原風景があり、日本に生まれ育った身としては、どこか懐かしさを感じずにはいられない。どうも電気が通って間もない頃らしく、しょっちゅう停電する電燈に対して「電気などという、手にとって確かめられもせぬものは、やはり信用せぬに越したことはない。」という征四郎の考えは微笑ましいが、現代の状況を鑑みれば手放して笑えない気もする。

少女や女性がメインとなることが多い梨木香歩の作品で、男性目線の物語は珍しい。征四郎と高堂の会話は明治時代の男子学生同士のものなのだろうが、ユニークで絶妙な掛け合いには毎回くすりと笑ってしまう。そして、たとえば、散歩の途中で、ふきのとうを探す小鬼に出会った征四郎は何の気負いもなく「よし手伝ってやろう。」と一緒に探し始める。梨木香歩のエッセーに度々登場する「理解はできないが受け容れる」、「日常を深く生き抜く」ことを、ごく自然に実行している人物が征四郎ではないかと思う。他にも異国の信仰に対する高堂の言葉からもエッセーに収録されたエピソードと重なるものがあり、改めて梨木香歩は作家として日常を生きているのだなという、冷静に考えれば妙な感慨を持つのである。

さらに、異界の生き物たちも征四郎を「受け容れている」ところがまた良い。その最たるものは高堂の言う「湖の底」、つまり彼方の世界に迷い込んだ征四郎の話だろう。おそらくは天上のものである葡萄を、彼の地の住人から勧められた征四郎は、その誘いをきっぱりと断る。そうして立ち去った後、随分力任せに彼の誘いを断ったと感じて再び戻って来て伝えるのだ。「私には、まだここに来るわけにはいかない事情が、他にもあるのです。家を、守らなければならない。友人の家なのです。」と。この言葉を聞いた彼らの征四郎への温かさは、読んでいるこちらの胸まで温かくさせる。

何度読んでも飽きず、読むたびに「ああ、いい話だ」と思える本に出会えることは、その人にとって果報だと思う。私にとって本書はそう思える物語だ。